香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），20：25－32，2010

語彙指導を目指したカタカナ語の誤用に関する分析
―留学生に対するディクテーション調査から―

畑　ゆかり・山下　直子*
（韓南大学校日語日文学科）（国際理解教育）

306-791　大田市大德區梧井洞133　韓南大学校日語日文学科
*760-8522　高松市幸町1－1　香川大学教育学部

An Analysis of Katakana Errors in Vocabulary Learning : Foreign Students' Dictation Ability

Yukari Hata and Naoko Yamashita*

Department of Japanese Language and Literature, Hannam University, Ojeong-dong, Daedeok-gu, Daejeon 309-791, Korea
**Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要　旨　外来語などのカタカナは，日本語学習者にとって学習が難しいものの一つであり，カタカナ語教育が必要であることが先行研究において指摘されている。留学生が講義や日常生活でカタカナ語を理解しなければならない場面は少なくないが，現場で十分な指導がされているとは言えない。そこで，本研究ではカタカナ語彙指導の基礎資料とするため，ディクテーションによる調査を行い，得られた誤用を分類，分析し，問題点を探った。

キーワード　留学生，カタカナ語，ディクテーション，誤用分析，語彙指導

1．はじめに

外来語などのカタカナの氾濫が問題にされるようになって久しい。文化庁の平成19年度「国語に関する世論調査」[注1]においては，86％の人が外来語や外国語などのカタカナ語が多いと感じることがあるとしており，外来語の難しさが指摘されるところである。わかりにくい外来語の言い換えも国立国語研究所で進められている[注2]。

このカタカナ語は，武部（1980）が「片仮名と平仮名との間には文字の種類や用い方においていろいろの異同があり，そのことが日本語学習者を悩ませている」と述べているように，日本語学習者にとっても習得が難しいものの一つである。特に，カタカナ語の表記に関しては，村上（1989），馬瀬・中東（1998）が韓国語母語話者，中東（1998）が韓国語母語話者とブラジル・ポルトガル語話者を対象とし，英語を与えて外来語を書く調査を行い，学習者の外来語表記には母語の影響が著しいことを明らかにしている。

堀切（2008）においても，英語を母語とする日本語学習者に質問紙調査を行った結果，外来語の聞き取りに対して習得困難を感じ，外来語使用に抵抗を強く感じるほど，外来語を拒絶す

る態度になりやすいことを明らかにしている。また，山下・品川（2009）でも，留学生の講義理解において，音と表記の結びつきが難しいカタカナ語が問題となるとしている。これらのことからも，カタカナ語彙の聞き取りの難しさが指摘できよう。

以上のように，カタカナ語は大きな問題でありながら，実際には日本語教育の現場で，十分な指導がされているとは言えないようである。金城（2001）は留学生への質問紙調査からカタカナ語の問題は重大であり，「大学の教育課程でカタカナ語彙教育を行う必要がある」としている。中山他（2008）は日本語教師，学習者への質問紙調査を行い，多くの学習者がカタカナに苦手意識を持ち教育を必要としているが，実際の教育現場では他の文字や語彙と同等には扱われておらず，「教師の意識改革及び教材や教授法の開発が急がれよう」と述べている。また，後藤他（2006）は，留学生にとってコンピュータの利用も欠かせないものになっているが，関連用語にカタカナ語が多いことも困難点として指摘している。

日本で学ぶ留学生にとって，講義や日常生活でカタカナ語を聞き理解しなければならない場面は少なくなく，カタカナ語彙指導は急務である。今後，カタカナ語について調査研究を行い，実証的な検証を積み重ねることで，カタカナ語の効果的な学習のための教授法や教材の開発の基礎資料を作ることが重要であると考える。

そこで，本研究では，留学生のカタカナ語の効果的な指導を目指し，留学生を対象としたカタカナ語のディクテーション調査[注3]の結果得られた誤用を分析することで，学習者が直面している問題点を明らかにする。なお，本研究でのカタカナ語とは，カタカナで表記される言葉を指す。カタカナで表記されるものには，外来語（外国語）や和製外来語等の日本独自に作られたものもあるが，それらをすべて含む。

２．研究方法

２．１　調査対象者

調査対象者は日本国内の２大学の学部に在籍している中・上級レベルの留学生40名（男性16名，女性24名）である。母語は，中国語母語話者（台湾を含む）が25名，韓国語母語話者が12名，マレー語母語話者が２名，ベトナム語母語話者が１名である。母国での学習を含めた日本語の総学習期間は１年以上２年未満の学習者が３名，２年以上３年未満が13名，３年以上４年未満が９名，４年以上５年未満が10名，５年以上が５名である。

２．２　調査方法

畑・山下（2008）ではカタカナ語の誤用の傾向をみるため，調査項目として『日本語能力試験出題基準』（2002）に掲載されている４級語彙から61のカタカナ語を抽出し，ディクテーション調査を行った。その結果，特殊拍，濁音・半濁音を含む語彙の誤用が多かったことから，本調査では前回の調査で使用した61語のうち，特殊拍を含む語彙を中心に35語を[注4]精選した。調査の方法は前回と同様，カタカナ語を２回聞かせ，シートに書かせるというものである。

さらに本調査では，調査対象者のうち10名（中国語母語話者４名，韓国語母語話者６名）が授業時間内に発表した発話のデータから抽出したカタカナ語と，必要に応じて行ったフォローアップ・インタビューの結果も考察の際，参考にした。

２．３　分析方法

学習者にカタカナ語を聞いて書かせた合計1400のデータから誤答を採取した。一つの語の中に複数の誤用が現れた場合，それぞれを一つの誤用とした。次にこれらの誤用を以下の表１のように，14の基準に分類し，集計した。分類基準は，必要な長音等が欠落したものや必要ない箇所に余分に挿入されたもの，平仮名を使うなどの表記上の間違い，母音や子音の間違いと

それらの基準にあてはまらないものである。また，誤用が語頭，語中，語末のどの位置に現れるかによっても分類，集計した。

ここでいう語頭とは第一拍の音節を指す。長音は，第一拍にある短母音が長音化した場合は，誤用が生じた位置が第一拍であることから語頭の誤用と分類する。例：スープン（スプーン）。

表１　分類基準

	基準	誤用例（正答）
1	長音の欠落	コーヒ（コーヒー）
2	長音の挿入	キローグラム（キログラム）
3	促音の欠落	スリパ（スリッパ）
4	促音の挿入	ネックタイ（ネクタイ）
5	拗音の欠落	ニース（ニュース）
6	拗音の挿入	ティーブル（テーブル）
7	撥音の欠落	ズーボ（ズボン）
8	撥音の挿入	ボンタン（ボタン）
9	濁音・半濁音の欠落	ホケット（ポケット）
10	濁音・半濁音の挿入	メードル（メートル）
11	表記	ハンかチ（ハンカチ）
12	母音の変化	スポーン（スプーン）
13	子音の変化	ストーグ（ストーブ）
14	その他	

３．結果と考察

３．１　誤用の分類結果

全誤答数は281（誤答率20.1％），全誤用数は360である。図１に示したように，２．３の基準によって分類した結果は長音や促音などの特殊拍と濁音･半濁音に関する誤用が多く見られた。

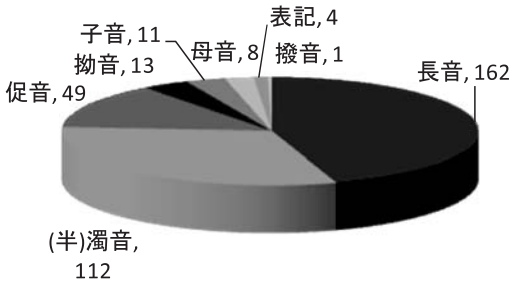

図１　全体の誤用数

長音に関する誤りが162と最も多く，全体の45.0％を占め，次いで，濁音・半濁音112（31.1％），促音49（13.6％），拗音13（3.6％），子音11（3.1％），母音８（2.2％），表記４（1.1％），撥音１（0.3％）である。それぞれ欠落，挿入等で見ると，長音の欠落が最も多く114（33.7％），次いで，濁音・半濁音の挿入57（15.8％），濁音・半濁音の欠落55（15.3％），長音の挿入48（13.3％），促音の挿入41（11.4％）である。

次に，誤用への母語の影響を見るため，中国語母語話者と韓国語母語話者の誤用を比較した。その結果を図２，３に示す。

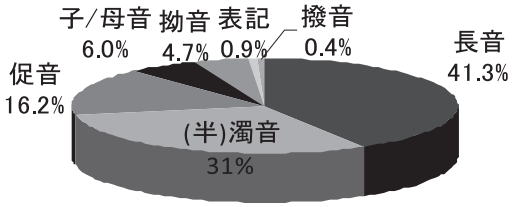

図２　中国語母語話者の誤用

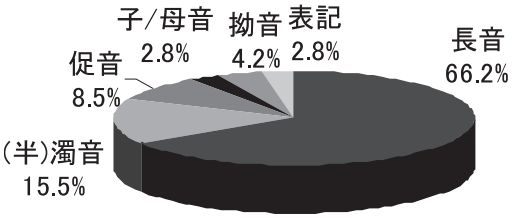

図３　韓国語母語話者の誤用

誤答数は中国語母語話者が192（21.9％），韓国語母語話者が62（14.8％）で，誤用数は中国語母語話者が235，韓国語母語話者が71である。誤用の割合を比較した結果，韓国語母語話者は長音の誤りが最も多く47（66.2％）と6割を超える一方，中国語母語話者は長音の誤りが97（38.0％）と最も多いものの，濁音・半濁音の誤りも72（30.6％）と多い。

さらに，誤用の現れる位置の語頭，語中，語末で分類した結果を図４に示す。語頭では促音に関する誤りが37（33.6％）と最も多く，次いで長音34（30.9％），濁音・半濁音18（16.4％），

拗音12（10.9％）とさまざまな誤用が見られた。語中では長音42（37.5％），濁音・半濁音45（40.2％）とほぼ同数で，促音の誤用が11（9.8％）と続いた。語末は長音に関する誤りが86（62.3％）と最も多く，次いで濁音・半濁音の誤りが49（35.5％）であり，長音と濁音・半濁音の誤りで９割を超えた。

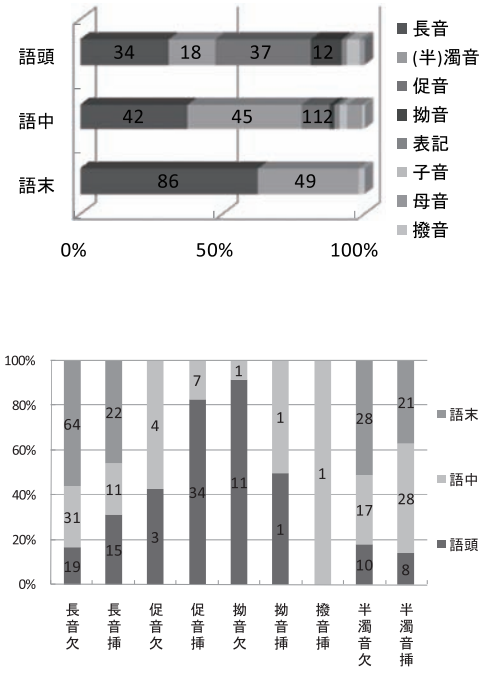

図４　語中の位置別に見た誤用

３．２　特殊拍の誤用

以上の結果から，特殊拍の誤用が多く見られたことが明らかになった。そこで，次に誤用の多かった特殊拍について誤用例も挙げながらみていく。

まず，最も誤用の多かった長音の誤用についてであるが，必要な長音が欠落したり，長音が不必要な場所に挿入される現象が見られた。これらは拍の問題であると指摘できるが，誤用の現れる位置でみると，語末86，語中42，語頭34と語末での誤用が半数を超える。さらに，語頭では欠落19（55.9％）・挿入15（44.1％）とほぼ同じ割合だったのに対し，語末は欠落64（74.4％）・長音挿入22（25.6％），語中は欠落31（73.8％）・挿入11（26.2％）とともに挿入が７割を超えた。長音欠落64は長音の誤用の中で39.4％と４割に近い。これは，金村（2003）でも述べられているように，語末の長音は短く聞き取りにくくなり，欠落しやすくなるためであると考えられる。

長音の誤用には，単純な欠落や挿入だけでなく，「スープン」「ギータ」「ボルペーン」のような長音記号「ー」が前後する（ずれる）という現象が見られた。また，長音と促音が交替するという誤用もあった。例えば，「ストーブ」が「ストッブ」，「ページ」が「ペッジ」，「セーター」が「セッター」のように，本来，長音が入るべきところに促音が入った誤用である。

長音のずれ，長音と促音の交替のいずれの現象も，拍数は正しく把握されているといえよう。しかし，長音のずれの場合は，語のどこかに長音が含まれており一拍伸びていることは理解しているが，どの位置に置かれているかが正しく把握できていない。フォローアップ・インタビューでも「長音があることは分かったが，どこにあるかはっきりしない」と述べられていた。また，長音と促音の交替は，直音とは異なる特別な音がそこにあることには気付いているが特殊拍の中で混同が起こっている。村上（1989）でも指摘されているように，拍を意識した際，そこに一拍が置かれていることは理解しているが，促音が入るのか長音が入るのかが理解できていないことを表していると考えられる。

長音に関する誤用が多い語を挙げると，「スプーン」「エレベーター」「パーティー」「スリッパ」「セーター」「タクシー」という順になる。これらの語を見てみると，「パーティー」「エレベーター」のような一語の中に長音記号が二つ入っている語，もしくは「スプーン」「スリッパ」のような撥音や促音が含まれている語である。長音記号が二つ入ることや他の特殊拍も含むことで，拍がうまく理解できず誤用につながったものと思われる。

例えば，長音と同時に撥音を含む「スプーン」

の場合，「スプン」と長音が落ちるものに加えて，「スープン」「スーポン」「スプンー」といった長音記号のずれる誤用が見られた。撥音も日本語学習者にとっては，拍が取りにくく，聞き取りに困難をきたすことがわかる。長音も拍の問題があり，一語に撥音と長音のような特殊拍が複数含まれている場合は，さらに拍感覚が鈍り，誤用が起きてしまうのではないかと考えられる。

次に，促音の誤用について述べる。促音の場合は，「マチ」「スリパ」のような必要な促音が欠落する誤用11（14.6％）よりも，「ネックタイ」「コッピー」「ハンカッチ」のような余分な促音「ッ」が挿入される誤用41（85.4％）が多く見られた。位置別では，「ネックタイ」「ギッター」のような語頭，つまり一拍目の後に余分な促音が挿入される誤用が34と促音の誤用全体の７割を占める。

特に，［k］［p］［t］［ts］の前に促音「ッ」が挿入される誤用が多く見られた。これは，日本語には有声・無声音の区別はあるが，中国語や韓国語のように有気・無気音の区別がないことに起因しているのであろう。呼気の出方によって語中の無声子音が有気音ととらえ，促音があるように聞いていると考えられる。

日本語の促音は短母音［i，e，æ，ʌ，ɔ，u］と無声破裂音［p，t，k］，破擦音［ts，ʧ］，摩擦音［s，ʃ］の間に入るという原則（カッケンブッシュ・大曽1990）をあてはめて考えてみると，これらの誤用も促音の原則に従っており，無秩序に作られたものではないことがわかる。促音の原則どおり，「ネック」「ネックレス」となる一方で，「ネクタイ」は「ネックタイ」とならないのがカタカナ語の難しい点である。

また，促音の誤用にも，「ポッケト」「スッリパ」のような促音の位置が前後する（ずれる）というもの，「コップ」が「コープ」や「ポケット」が「ポケート」のように，促音「ッ」に長音「ー」を入れる交替現象が見られた。このことから，先ほど述べた長音と同様に，促音も拍数の把握が難しいこと，また拍が意識できても，その一拍に何が置かれるのか理解するのは困難であることが指摘できよう。

最後に，拗音の拍も理解が難しいと予想される。拗音に関しても，「サッツ」のように拗音が落ちて促音が挿入されたり，拗音があることは分かっても「シャツ」が「シャッツ」のように拗音の後に促音が挿入されたり，「シャワー」が「シャーワ」のように拗音の後に長音が挿入されるものも見られた。拗音が一拍であることが正確にとらえられていないため，このような他の特殊拍が余分に挿入するような誤用が起こると予想される。

以上のことから，特に長音・促音・撥音・拗音といった特殊拍は単純な欠落や挿入だけでなく，位置のずれや他の特殊拍との交替が起こり，いずれも聞き取りが困難であることが明らかになった。特に，語末の長音欠落[注5]，語頭の促音挿入と語頭の拗音欠落は多くの誤用がみられるなど位置によっての違いも見られた。

３．３　濁音・半濁音の誤用

次に，濁音・半濁音の誤用について述べる。この誤用は，特に中国語母語話者では91（35.7％）と誤用の割合が高かったが，全体でも長音の誤用に次いで112と3割を占めた。挿入57（15.8％）と欠落55（15.3％）は，ほぼ同じ割合であった。濁音に関する誤用でも，本来は清音であるものが濁音・半濁音になる挿入や濁音･半濁音が清音になる欠落のほかに，「ストーブ」が「ストープ」，「コピー」が「コビー」など濁音が半濁音に，あるいは半濁音が濁音になる濁音と半濁音の交替も22と２割近く見られた。

無声音を有声音で表記した誤用として「コード」「ハンガチ」「スドーブ」などが挙げられるが，語頭は「ボッケト」一例で，語中と語末に多く現れた。一方，本来，有声音であるべきところに無声音をあてた「カレンター」「キロクラム」「ストープ」などの誤用は語中・語末にも見られたが，「キター」「ツボン」「スボン」など語頭にも見られた。濁音・半濁音の誤用は，従来言われているように，日本語にある有声音・無声音の区別が中国語や韓国語ではないことに起

因するのであろう。しかし，濁音・半濁音の誤用は長音の誤用についで多いものの，中国語母語話者では全体の30.6％を占めるが韓国語母語話者では15.5％と，誤用の傾向には違いがみられることから母語別により詳細に調査しなければならない。

韓国語母語話者に関して，中東（1998）で，韓国語にない/f/音を外来語では激音/ph/で表記するために英語/f/をパ行のカナで表記した者が多かったとしているのと同様に，今回の調査においても「フォーク」を「ポーク」，「ポクー」とする例が見られた。また，聞き取り以外に発話のデータでも，「ファイル」が「パイル」，「カフェイン」が「カペイン」のように発話する誤用が見られた。

この「フォ」の聞き取りは難しいようで，このような例以外にも「フォーク」は「ホーク」，「ホォーク」「フォク」，「フゥーク」，「フオーク」とさまざまな誤用があった。また，韓国語話者だけでなく中国語話者にも同様に誤用が見られた。この点については母語の影響を含めてさらに検証が必要である。

３．４　誤用のパターン

３．３で触れたように「フォーク」という語は，学習者によってさまざまな誤用に分かれた最も誤用の種類の多い語でもある。そこで，それぞれの語が何種類の誤用に分かれたのか誤用のパターンをみた（図５参照）。

誤用のあった34語のうち，誤用のパターン数が１種類のみの語が11.8％（４語），２種類が23.5％（８語），３種類が26.5％（９語）と６割を占め，誤用には一定の傾向があるようである。一方，パターン数が６種類から８種類みられた語の割合は，それぞれ2.9％，5.9％，2.9％と低く，「フォーク・スプーン・ストーブ・バター」の4語のみであった。「フォーク」は/f/音の難しさ，「スプーン」は特殊拍の長音，撥音と半濁音が同時に含まれること，「ストーブ・バター」は『みんなの日本語』などの初級教科書の語彙にも含まれず，馴染みが薄いため誤用のパターンが分かれたと思われる。

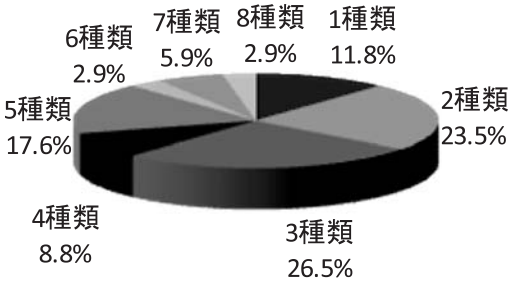

図５　誤用のパターン数

誤用のパターン数の平均が3.4種類であったことからも，学習者の誤用は無秩序に作られるわけではなく，そこには一定の基準があるものと予想される。このような習得上の困難点，誤用の傾向を探ることから，指導すべきポイントを抽出することが可能ではないかと思われる。

４．まとめと今後の課題

以上のように，カタカナ語の聞き取りで直面する問題点を明らかにするため，留学生を対象として調査を行い，誤用を分類し分析を行った。その結果，カタカナの聞き取りにおいては特殊拍と濁音・半濁音の誤用が多いことがわかった。特に，特殊拍に関するものでは，語末の長音欠落，語頭の促音挿入と語頭の拗音欠落に多くの誤用がみられた。誤用のパターンにも一定の基準があることが予想される。また，韓国語母語話者は長音の誤りが６割を超える一方で，中国語母語話者は長音の誤りが最も多いものの，濁音・半濁音の誤りも多いというように誤用の傾向には違いがあり，母語の影響を検討する必要があると思われる。

今回の結果からカタカナ語の聞き取りに関するいくつかの問題点が明らかになった。今後，この結果をカタカナ語彙指導の基礎資料とし指導へとつなげるために，さらなる検証が必要である。今回のディクテーション調査では，聞いて書き取るという過程の中の音の聞き取り，音から意味の認識，カタカナでの表記の各段階で誤りが発生する可能性が考えられ，どの段階で

誤りが生じたのかを特定することは難しい。また，誤用分析には限界もあるため，他の方法も用いて，聞き取りの過程を探ることが課題である。また，中国語母語話者・韓国語母語話者については母語の影響をみることも必要であろう。さらに，調査用紙に英語のメモが見られ，フォローアップ・インタビューでも英語を連想していると言う声もあったことから，英語のスペルとの関連も探っていきたい。

カタカナは，外国語を日本語化するルールもさまざまでゆれも見られ，日々新語も誕生するなど，すべてを体系的に教えることは難しい。しかし，ゆるやかな規則性はあり，誤用に関しても一定の傾向があると考えられる。身近な語で誤用の傾向を把握することは新しい語に対応する力をつけるためにも重要だと考える。そのような点に注目した効果的な指導方法と教材の開発を今後の課題としたい。

本稿は2009年７月に行われたJSAA-ICJLE2009日本語教育国際研究大会（ニューサウスウェールズ大学）においての口頭発表に加筆修正したものである。

注

注１　文化庁のホームページの『平成19年度「国語に関する世論調査」の結果について』を参照。http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h19/kekka.html

注２　国立国語研究所では平成14年から公共性の高い場で使われている分かりにくい外来語について，言葉遣いを工夫し提案することを目的として，言い換えが進められている。

注３　本稿のディクテーション（dictation／書き取り）とは，音声を文字で書き取る練習やテストの方法である。言語教育や言語テストにおいて用いられる。

注４　今回，調査項目とした35語の語彙は次の通りである。エレベーター，カレンダー，ギター，キログラム，コート，コーヒー，コップ，コピー，シャツ，シャワー，ストーブ，スプーン，ズボン，スリッパ，セーター，ゼロ，タクシー，テーブル，デパート，ナイフ，ニュース，ネクタイ，パーティー，バター，パン，ハンカチ，フォーク，ページ，ベッド，ボールペン，ポケット，ボタン，マッチ，メートル，レストラン

注５　語末の長音欠落に関してはゆれもみられ，どこまで許容するかについては検討が必要であるが，ここではその点に触れず，出題基準での表記を正解とした。

参考文献

１）カッケンブッシュ寛子・大曽美恵子（1990）日本語教育指導参考書16外来語の形成とその教育，国立国語研究所

２）金村久美（2003）カタカナ語書き取り課題に見られる誤りの原因－特殊拍を中心に－，日本語教育，119号，pp.120

３）金城ふみ子（2001）外国人学生に対する片仮名語彙教育の在り方－大学教育課程－，東京国際大学論叢 経済学部編，No.25，pp.41-52

４）国際交流基金・日本国際教育協会（2002）日本語能力試験出題基準改訂版，凡人社，pp.11-20

５）後藤寛樹・深澤のぞみ・濱田美和（2006）留学生向けコンピュータ教材の開発とその使用，日本語教育，110号，pp.150-159

６）武部良明:（1980）日本語教育におけるカタカナの問題，日本語教育，42号，pp.1-16

７）中東靖恵（1998）第二言語学習における日本語外来語表記の実態とその問題点の分析－，人間文化論叢，Vol.1，pp.65-75

８）中山恵利子･陣内正敬･桐生りか･三宅直子（2008）日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方，日本語教育，138号，pp.83-91

９）畑ゆかり・山下直子（2008）聞き取り調査によるカタカナ語の誤用分析，比較文化研究，84号，pp.103-110

10）堀切友紀子（2008）日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度，異文化間教育，28号，pp.74-86

11）馬瀬良雄・中東靖恵（1998）日本語教育における外来語の表記の諸問題－韓国語母語話者の日本語学習者の場合－，フェリス女学院大学文学部紀要，第33号，pp.85-111

12）村上治美（1989）韓国人学習者の日本語の外来語表記，東海大学紀要留学生教育センター，Vol.9，pp.1-12
13）山下直子・品川直美（2009）講義理解のためのストラテジーに対する留学生の認識－学部留学生への縦断的調査から－，言語文化と日本語教育，第37号，pp.1-10